

奈良ものろーべ

(34)

NPO法人奈良生活文化センター
ソムリエの会 事務局長 鉄田憲男



木津の文化財と緑を守る会

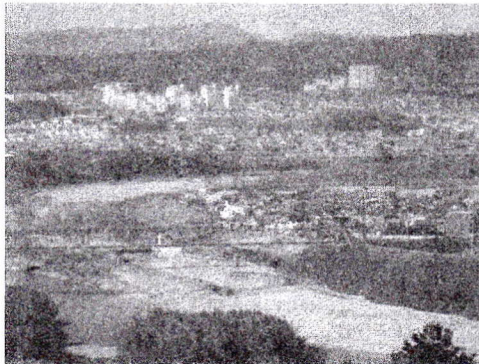
京都府木津川市の「木津の文化財と緑を守る会」(岩井照芳会長)は昨年(平成30年)設立40周年をお迎えになった、おめでとうございませう。

昭和51(1976)年、奈良時代の官庁跡とみられる「上津(こうづ)遺跡」が木津川沿いの港(泉津)の一角で発見された。53(1978)年この保存運動に立ち上がったが、望みはかなわなかった。「失敗の最大の原因は、歴史の知識が不足していたことだ」との反省から、同年4つの研究部会を立ち上げ、その成果を講

演会や町の広報誌に発表してこられた。

岩井会長には平成20(2008)年10月、「興福寺の廃仏毀釈」をテーマに講話と現地見学会をお願いし、約20人の仲間と旧境内地を歩いた。会長の深い知識と丁寧なガイドぶりには感服した。

昨年11月、同会は設立40周年記念誌を発売された。充実した研究レポートのなかで特に目を引いたのが、「木津晒(きづざらし)」



鹿背山城跡から泉津を望む

の話だ。

奈良晒はよく知られている。麻の織物で肌ざわりがよく、汗もはじくので、鎌倉期以来、神官や僧尼の衣に好まれてきた。江戸時代初め、清須美源四郎が晒法を改良、徳川家康に誉められ、幕府の保護を受けて販路も拡大した。明暦3(1657)年、奈良町の惣年寄が麻布に検査印を押すこ

とになつた(『奈良まほろばソムリエ検定公式テキストブック』)。

一方、木津晒の実態はよく分からなかつた。今回、岩井会長は古文書『山城判場(はんば)之由緒』などから、木津晒は独立したブランドであり、布に検査印を押す判場が木津にあったことを突き止めたのである。

こんなエピソードも添えられている。「筆者(岩井会長)の近所にお住いのハンジ(屋号)さんと世間話をしているとき、偶然『うちの家は木津の判場で

印を押すことを生業としていた』と聞かされびっくりした」。会長は「今も木津川市の経済・文化圏は奈良で、京都府民は『木津は奈良』と見ている。しかし奈良県民からすると『木津は京都』となり、エアポケットのようになってきている。恭仁京(くにぎょう)の研究や復元整備が進まないのも、それが原因」。同会は今も活発に研究や講演活動を行うとともに、鹿背山(かせやま)城跡の整備(これまで約300回)にも取り組んでいる。事務局長の後藤啓治さんは記念誌に「城整備雑感」として、このように記している。「草を刈る人、倒木を切り、細かく裁断し、

置き場を確保するための場所整備等、全員が一心不乱に作業に専念」。「2時間程で作業が終わり、改めて周囲を見渡すと、あれほど荒れていた主郭が見事に整備され、見学に来られた人々に感動を与えるようになったのを実感した」。「汗を拭きながら、終わった後の達成感、行った者でないといわれない満足感でいつも満ちております」。

この城跡は今年中に、国史跡に指定される予定だ。また同会の尽力により、奈良時代の梅谷瓦窯(がよこ)跡が保存された。

記念誌(限定1000部)は送料込み1000円で購入できる。同会のサイトまたはお電話で(事務局 090-5129-8908)。

これからも旺盛な活動を期待しています！

毎月第4週連載

地元を学び見守り40年